

日本郵船／MTI、CAコンテナ輸出、じわり拡大



CAコンテナ輸出、じわり拡大

日本郵船／MTI

日本郵船および同社グループの研究開発会社MTIが手掛けるCA(Controlled Atmosphere)コンテナ輸送の利用が徐々に広がっている。現在ではトライアルの段階を終えて実輸送が始まっており、毎週アジア向けに定期的に出荷。窒素をコンテナ庫内に送り込み、青果物の呼吸を抑えることで品質劣化を防ぐアクティブ型CAの利用だ。農業団体や各地の自治体によるトライアルも活発化しており、将来的に実輸送への移行も見込まれる。物量が増加し、また輸出ノウハウが蓄積されることで、今後輸送品質のさらなる高度化も可能となる見通しだ。

郵船とMTIは2013年度から、日本からの果物や生鮮品輸出でアクティブ型CAコンテナを活用した輸送の拡大に取り組んできた。日本からアジア市場を中心に食品輸出の関心が高まり、さまざまな企業や自治体、農業団体が輸出強化を目指す中、航空輸送に比べてコストを抑えつつ鮮度を維持したまま輸送が可能なのがCAコンテナだ。導入当初は主にトライアルで、博多から香港などへの果物や葉物野菜などの出荷を手掛けてきた。

現在では、トライアルの段階を経て実輸送が行われるようになり、通常のリーファー貨物でも一定の鮮度維持は可能だが、CAコンテナを利用することでより高品質の輸送が可能となり、現地到着後のロス率もほぼゼロに抑えられるのが強みとなっている。

また、農業団体や自治体によるトライアルも活発化している。現在、農業団体がさまざまな仕出地から20フィートや40フィート型CAを利用してトライアル輸送を定期的にも実施。販路のめどが立てば実輸送へ結びつく可能性が高い。また自治体では、各県が主体となった地元の名産品などを輸出振興に向け取り組みを強化中。例えば茨城県では、一部他県からの貨物も集める形でメロンや梨、イチゴなどさまざまな貨物のCAコンテナによる蔵置実験を複数回実施。CA輸送のメリット・デメリットの評価・分析を行っている。郵船のアクティブ型CAコンテナを利用し、MTIがコンサルタントとして実験に参画し、さらなる知見の蓄積や輸出者へのアドバイスなどを行っている。

今後の課題は輸出量の拡大だ。日本産の果物や生鮮品は高価格帯の商品が中心で、また全体の物量もまだ少量にとどまっている。現在は数十品目の商品を混載する形で出荷しているが、果物や野菜ごとに最適な温度帯や酸素濃度といったCA環境は異なるため、本来は輸送品目ごとにコンテナを仕立てて輸送するのが望ましい。ただ、通常のリーファーコンテナと比べて運賃面ではまだ割高なこともあり、物量が増加しなければ問題は解決しない。

MTIの田村健次取締役は「これまでのトライアルを通じ、輸出者の間でもノウハウ蓄積が進んでおり、今後は物量増加も期待できる」と指摘する。果物や農産物にはそれぞれ収穫時期があるが、海外各地の食料品店などで日本産食品を販売し続けるためには、年間を通して商品を供給できる体制づくりが不可欠だ。収穫時期が異なる商品の出荷をコーディネートし、連携して輸出するための仕組みづくりが求められる状況となっている。田村取締役は「トライアルを通じて各貨物の出荷最適スケジュールもわかってきた。こうしたリレー出荷が可能となれば、さらにアクティブ型CAコンテナが活躍できる機会は増えるだろう」と今後の拡大に期待を寄せている。